50

1928年6月8日東京学士会館開催のスイス・バーゼル大学耳鼻科ジーベンマン教授追悼会

高橋　　薫[1)]，高橋日出雄[2)]

[1)] 医療法人社団成風会 タカハシクリニック（松戸），[2)] 医療法人社団成風会 高橋クリニック（足立）

1928年4月4日スイス・バーゼル大学耳鼻科フリードリッヒ・ジーベンマン教授逝去（ジーベンマン教授は，1852年生まれのスイスの耳鼻咽喉科医で1871年チューリッヒ大学卒後ウイーン，ブレスラウ，ミュンヘンで耳科学と咽喉科学を修め，1892年バーゼル大学耳鼻咽喉科学教授就任，1896–1922年バーゼル市民病院耳鼻咽喉科部長兼任，内耳解剖学と聾唖病理研究で名を馳せ，1908年にlipoid proteinosis（Urbach-Wiethe病）初めて報告）．逝去2ヶ月後の6月8日ジーベンマン教授追悼会が東京で行われた．スイス・バーゼル市書庫に保存された故ジーベンマン先生追悼會録前書によれば「昭和三年六月八日午後六時より新装なりし一ッ橋學士會館に於て，故ジーベンマン先生追悼會は本邦門下生の発起にて催されたり．會する者五十有餘人斯道の耆宿岡田（和一郎），金杉（英五郎）兩博士の参列あり．瑞國のドクトル三名（Dr. Thomann，Dr. Paravicini，Dr. Furtwaengler）又列席す.」まず増田（胤次）東大教授が司会者として開式を宣しジーベンマン先生の履歴及学問上の遺蹟に就て約二十分詳述「吾々の常に敬愛せるフリードリッヒ・ジーベンマン先生には1928年4月4日攝護腺（前立腺）癌腫にて永き御病苦を忍ばれる後76歳の御高齢を以て瑞西國バーゼル市に於て御逝去に相成りましたことは耳鼻咽喉科学界に於る重大なる損失であることは申す迄もなく親しく先生の御薫陶を蒙りました吾々門下生にとりては實に哀惜の情に堪えざる次第であります．日本に於ける門下生が発起となりまして先生を追悼すべくこの会合を企てましたると所幸に各位の御賛同を辱ふし殊に大日本耳鼻咽喉科會々頭たる岡田（和一郎）博士及同じく名誉會頭たる金杉（英五郎）博士の御臨席を得且つ又兩先生共に一場の追悼の辭を御述べ下さることを御快諾下されましたことは吾々の企てをして一層光彩あるものとせられたることでありまして開会に當り茲に御來會の各位に御禮を申し上げると共に兩先生に対して特に謝意を表する次第であります．……」と述べ，式次第に基づき，浅井博士による［ジーベンマン先生の聾唖の研究に就て］三十分講演．その後，追悼會録前書によれば「金杉・岡田の両博士又交々立ちて同先生の学識，人格を称え学蹟及殊に本邦門下生に対するの弁を述べられ，又瑞国公使の書翰を黒須（巳之吉）氏代読さる．式後記念写真はDr. Hans Thomann（日本ロシュの薬学博士で薬剤情報責任者）が未亡人に呈上予定．八時半より開宴，佐藤（信郎）・浅井（健吉）・中村（豊）・黒須（巳之吉）・津田（終吉）交々に先生の風格を偲び，先生の精励格勤学に忠なるを讃嘆す．十時半散会す.」とあり．この瑞西留学者5人によるジーベンマン先生追悼卓上演説と金杉博士追悼辞，岡田博士追悼及感謝辞，パラヴィチニ氏感謝の挨拶，瑞国公使書簡（代読黒須巳之吉）の追悼録（集合写真を含む40頁）及び参加者の自署帳（8頁）がバーゼル市書庫（Bibliothek des medizinhistoriscien Instituts, Zurich チューリッヒ医学史研究所）に残されていた．今から104年前の1914年～1915年第一次世界大戦勃発時ジーベンマン教授の下，臨床留学でバーゼル大学耳鼻科助手として働いていた演者らの母の叔父耳鼻科医の黒須巳之吉（当時金杉病院副院長で金杉英五郎院長の支援を受けドイツ・スイス留学）の足跡を追って演者ら2018年5月バーゼル大学を訪問時，バーゼル大学同窓会長Dr. med. René Fröscher（Alumni Manager Medizinische Fakultät Basel Institut für Pathologie Universitätsspital Basel）及び図書館文書課責任者Dr. Hermann.Wichers（Head of Library Users service at Staatsarchi）により追悼録（集合写真を含む40頁）及び参加者の署名の自署帳（8頁）を準備して頂き拝見する機会を得，親切にもそれらの複写を持ち帰ることができました．

（ドイツ語でSiebenmannジーベンマン，英語でシーベンマン）